

日本国の「令和」は激動の世界情勢に真正面から対峙する時代 日本人も原点回帰し強い気概で「国家の再生」に全力尽くす時代へ 当社も今こそ「シッカリ者のコミュニティ」を築き上げる時代へ

ブラックストーン

発行日
2019年5月20日
発行所
石黒建設株式会社
経営管理本部
題字は齊藤兵衛
遺筆

2019年

「初心忘るべからず」プロの安全に、横着行動なし！

安全活動
スローガン



齊藤泰輔社長 書



青柳志郎氏 書

※青柳志郎氏は富山在住の書家。
北陸書道院理事長。

「新天皇と新上皇」
本年4月30日に「平成」が
終わって、5月1日から「令和」が始まった。私達全員が歴史の証人になった訳である。大化の改新の「大化」以来248番目の元号である。思い起こせば「平成」は30年前の1月7日に昭和天皇の崩御に伴い、深い悲しみの中の改元であり、「平成」がしめやかに始まった。今回の改元は天皇の自主的に退位されたものであり、江戸時代の

「令和」(れいわ)の典拠
■出典
「万葉集」巻五、梅花の歌三十一首并せて序
■引用文
初春令月、気淑風和、
梅披鏡前之粉、蘭薫珮後之香
■書き下し文
初春の令月にして、気淑く風和き、
梅は鏡前の粉を披き、蘭は珮後の香を薫らす
■現代語訳(中西進著「万葉集」から)
時あたかも新春の好き月、空気が美しく風はやわらかに、梅は美女の鏡の前に装う白粉のごとく白く咲き、蘭は身を飾った香の如きかおりをただよわせている

光格天皇以来であって20年ぶりのことである。

このような事情で、皇太子がここに天皇に即位された次第であるが、国民の気持ちは前回と大きく違っており、上皇・上皇后が永年にわたり果たされて来た役割への労いと感謝と共に、新天皇・皇后へのお祝いと今後の活躍への期待を込めて、国内外に明るい祝賀ムードが広がっている。

「令和の年号と万葉集」

今回決まった新元号の「令和」については、日本最古の歌集「万葉集」を出典とし、国書(日本古典)からの採用は初めてのことである。福岡県の大宰府

朝床に 聞けばはるけし 射水河

朝漕ぎしつ 唱ふ船人

大伴家持(巻十九・四一五〇)

朝の床の中で耳を澄ますと遠くはるかに聞こえてくる。射水河(現在の小矢部川)を朝漕ぎながら歌う舟人の声が。

で長官を務めながら詠んだ大伴旅人の「梅の花」の序文にある、「初春令月、気淑風和、……」からの引用であるが、この考案者は富山市にある高志の国文学館の館長・中西進氏(大阪女子大元学長)であるらしい。旅人の長男が後に名をなす家持であるが、父と共に大宰府にいた際の「梅の花」らしい。なお、世間の識者は2世紀の後漢の時代の張衡の帰田賦の一節に、「仲春令月、時和氣清」があることを指摘しており、中国方面の影響を受けていたに違いない。

7世紀後半から8世紀後半の奈良時代に編纂された万葉集は、天皇や貴族だけでなく防人や農民まで幅広い層が詠んだ4536首が収められている。そもそも万葉集のネーミングは諸説あるが、「万の言の葉を集めた歌集」や「万世にまで永く伝えられるべき歌集」と言われている。

この「令和」の解説は別項の通りであるが、新しい時代の「麗しい平和を祈る」と言う意味合いや、「心安らかな大和の国の発展を願う」と言う趣旨のようであり、口に出して読めばフレッシュな響きがある年号であり、実感はまだ薄いけれども新時代の始まりを感じさせる昨今である。ただ私達が祈ることとして、「平成」の時代のような大きな自然災害が何度も起きないことであり、「国破れて山河あり……」でないことである。

「万葉集と北陸地域」

令和の新年号で、万葉集が一躍注目され大きなブームが起きているが、北陸地域とも関連が深い訳である。

それは万葉集の編纂者と言われている大伴家持(やかもち)は、父と13歳で死別しているが、大成して746年から5年間越前中国の国守として富山県高岡市に住んでおり、万葉集に残した全473首の内223首が越中時代の作であったことが有名である。一方、貴族の大臣宅守(やかもち)が740年に流罪で福井県越前市に1年間滞在した際にも63首の歌を残し、大伴家持とも交流していることもあるとされている。

「令和」採択で九州の大宰府だけでなく高岡市や越前市にも訪れる人が多くなっており、中西進氏の関係から富山市の国文学館も賑わっている。

「令和の日本展望」

今回の元号に関しては、やや政治的な背景や匂いが

報道されているが、どんな時代になっても行くのか誰も分らないところである。しかし、決定に際し今回の新元号に込めた安倍首相の思いについては、世界の激動情勢を考える時に、なかなか容易なことではないように思えるが、皆さんどう考えますか。

我々国民にとって、改元の意味を良く考えて見れば、本来は厳粛な不幸な出来事が背景にあったの転換策であり、今回のような祝賀ムード一杯はあり得ないスタートであるから、何かシックリと来ない感じがしている。現在である。特に、日本を取り巻く諸情勢が厳しさを増して来ている中で、将来に向かっている展望が描けない現状であり、政治家が国民へ幾ら10連休等の計らいをしても、何か不安だけが広がることになっている。

ここで戦後を回顧すれば、昭和20年8月15日から平成31年4月30日まで11年4月30日までの間、幸いにも日本は1回も戦争に巻き込まれることなく、平和国家として世界でも珍しい存在となった訳であるが、これに胡坐をかきこはしても出来ません。正直に言えば、敗戦国の日本は勝戦国の米国に従って、主に経済面のみ復興と発展に全力投球し、必死に頑



家持の父で大宰府の長官だった大伴旅人が開いた「梅花の宴」を再現したジオラマ。ジオラマのある太宰府市「大宰府展示館」は令和の新名所として来館者が急増している。



遠くに立山を望む高台に立つ大伴家持



雄神河 紅にほふ 娘子らし

葦附取ると 瀬に立たすらし

大伴家持(巻十七・四〇二一)

雄神川(現在の庄川)が一面赤く照り映えている。あでやかな少女たちが葦附(淡水藻)を採るために瀬に立っているらしい。

立山に 降り置ける雪を

常夏に 見れども飽かず 神からならし

大伴家持(巻十七・四〇〇一)

立山に降り置ける雪は、夏のいま見ても飽きることがない。神の山だからに違いない。